

社会心理学研究の在り方を振り返って

名古屋大学 名誉教授

原岡一馬 (はらおか かずま)

最近、学会に出席することが少なくなり申し訳なく思っている。年齢と出不精のせいもあるが、発表される研究内容が理解できないことが多いからである。高度に抽象化され、モデル化され、操作されて、得られた結果をどのように解釈してよいかわからないことが多いからである。もちろん、研究であるから、対象を特定して抽象化し、モデル化し、それを操作して、得られた結果から人間行動の法則性を推定、解釈する方法は妥当であるが、その過程に飛躍があるような気がしてならない。

もう一つは、調査研究などの結果の解釈である。たとえば大量の調査対象に回答を求め、その統計結果から結論を推定するやり方である。確かにこの方法は有用であるが、調査項目や調査対象、調査の場が適切なのかなどの検討がもっと必要な気がしてならない。回答数がいくら多くても、求める研究課題と調査内容や協力者の心理状態とがマッチしていなければ、せっかくの調査も意味をなさない。

戦後間もなく、筆者が行った集団決定の研究を思い出した。福岡県のある農村地区で、口角炎にかかっている者の割合が40パーセントもあり、ビタミン不足が原因だということが調査からわかっていた。県の栄養士たちは、「米糠」を食べなさいと唱導していたが、ほとんど実践されていなかった。筆者は、Lewinらが提唱し、RadkeとKlisurichらが1947年に行った食習慣変容の集団決定の現場実験を思い出した。その対象は母親で、乳児に、適量のミルクや肝油などをどのようにしたら与え続けるだろうかという課題であり、「集団決定」という手続きであった。筆者は、小集団の中で意見を述べ、他者に認められる中で自己決定を行うことは、自己関与を高め実践効果を挙げるであろうと考え、上記農村地区で婦人を集めて、集団決定と講義グループとの比較条件をつくり、その後、4週間、米糠を食べたかたを調査した。その結果、集団決定のグループが講義グループより有意に多く食べていて、しかも、期間が長くなるほど差が大きくなっていった。この現場実験は、集団決定の手続きが人間行動を積極的に働かせる機能として有効であることを示したものと解釈した。

研究手続きが抽象化されることは望ましいことではあるが、人間行動にとって本質を突いているかどうか考えなければならないような気がしてならない。



Profile 一原岡一馬

1930年生まれ。1960年、九州大学大学院教育学研究科教育心理学専攻博士課程単位取得。教育学博士（九州大学）。佐賀大学、名古屋大学、久留米大学で教授を歴任。専門は社会心理学、グループ・ダイナミクス。著書は『心理学研究の基礎』（ナカニシヤ出版）、『人間行動の心理学』（編著、ナカニシヤ出版）、『組織コミュニケーション』（編著、福村出版）、『人間の社会的形成と変容』（編著、ナカニシヤ出版）、『教育心理学』（編著、放送大学教育振興会）など。